

令和 8 年度 入学 試験 問題

総合問題 (学校教育科学)

注意事項

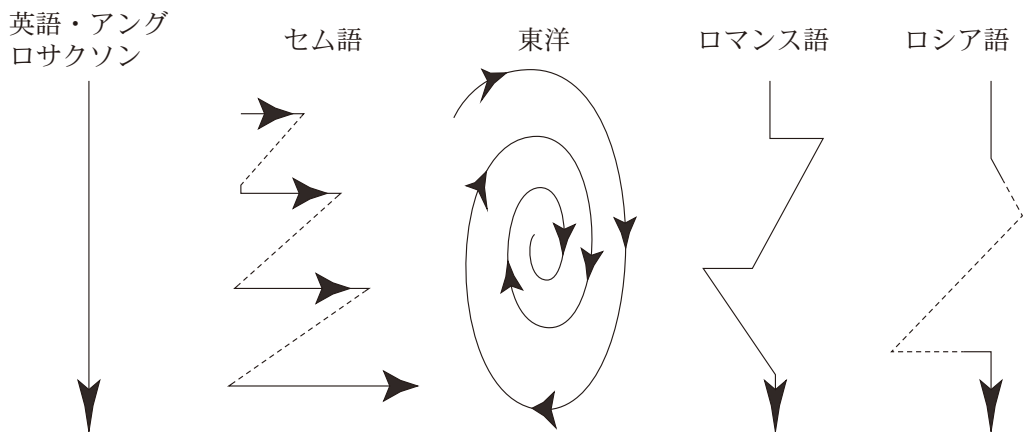
1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入ください。
3. 解答用紙は4枚、草稿用紙は2枚です。
4. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
すべて記入ください。
5. 試験終了後、問題冊子と草稿用紙は持ち帰りください。

問題 I 次の文章を読み、以下の問いに答えよ。

1. 何が〈論理的〉だと感じさせるのか

グローバル化が進み、世界共通のビジネスモデルや教育モデルが示される一方で、文化の衝突は思わぬところで起きている。衝突の影響は極めて深刻なのだが、その実態は見えにくく、意識されずに過ぎてしまうことが多い。たとえば母国で優秀な成績を修めた学生が、海外の大学でつまづくことがある。言語や教育方法の違いがつまずきの理由に挙げられがちだが、母国と留学先の作文／小論文の「論理の展開の違い」に根ざした、思考法の違いが原因であることも多い。

この文化による論理展開の違いをいち早く指摘したのは、アメリカの応用言語学者カプランである。カプランは、大学で留学生の小論文指導を行うなかで、英語が上達してもなかなか小論文が上達しない留学生が多いことに長年疑問を持っていた。そこでカプランは世界 30 カ国以上から来た留学生の小論文を分析し、図 1 のように言語圏別に論理の展開の特徴を視覚的に分類してみせた。



出所：Kaplan(1966：15)の図より筆者訳

図 1 言語圏による論理展開のパターン

カプランの分類によれば、英語圏は「直線的」な展開、ヘブライ語やアラブ語などのセム語圏は類似することがらを詩の対句のように「平行」させて進む展開、東洋は渦巻きのように主題から遠いところより始めて「間接的に主題に近づいていく」展開、フランス語に代表されるロマンス語圏は余談を交えて「^う紆余曲折」しながら進む

展開と分析されている。そして五つめのロシア語圏は、パラグラフ(段落)の間のつながりがパターン化できないとされている。アメリカ人のカプランにとってロシア語圏の学生の論理展開の解釈が困難だった理由としては、ロシア語圏では美辞麗句と慣用的な表現を使って儀式的に書いたり語ったりする伝統的なレトリックが広く用いられていること、また政治的な理由で意見の直接的な表明が差し控えられることなどが考えられる。論理的という、英語圏の直線的な論理展開が自明で普遍的なものを受けとめられているが、カプランの分類を見ても、いくつかある型のひとつにすぎないことが分かる。

カプランによれば、読み手が「論理的である」と感じるには、統一性と一貫性が必要であるという。統一性とは、記述に必要な十分な要素があることであり、一貫性とは、それらの要素が読み手に理解可能な順番で並んでいることである(Kaplan 1966: 5)。これらを総合すると、論理的であるということは「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と定義することができる。

ここで重要なのは、「読み手にとって」という部分だ。世界に共通する普遍的な「必要な要素」とそれを並べる「順番」があるわけではなく、読み手はその社会・文化の中で馴染んだ型があり、そこにはいくつかのパターンが認められるということである。カプランが図1で示した四つのパターンは、その型を視覚的に表現したものであった。「矛盾のないこと」が論理学の三原則のもとになっているように、前後の内容に矛盾がないことが作文でも重要である。しかし、その形式論理の無矛盾の原則を守った上で、読み手と書き手の間に作文に必要な要素とそれらを述べる順番についての合意が必要だということである。つまり論理的であることは、社会的な合意の上に成り立っているものだといえる。だからこそ文化圏によって違いが現れる。それは、言語や文化に左右されない論理学の形式論理とは異なる〈論理〉の考え方である。

論理的であること = 「読み手にとって記述に必要な要素が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」→論理的であることは社会的な合意の上に成り立っている

カプランは、「それぞれの文化は文化に特徴的なパラグラフの順番を持ち、言語のこの部分の習得は、その文化の論理システムを学ぶことに他ならない」と述べている (Kaplan 1966 : 14)。このカプランの主張を各言語の文法の構造とパラグラフの構造の類似から根拠づける人もあるが、「必要な要素とそれを並べる順番」は文法という言語の内的システムのレベルではなく、レトリックが扱う作文／小論文の型（「構造／配置」）のレベルで考えた方がより有益である。各言語の文法の違いが論理の違いの理由だとすると、私たちは異文化で暮らしても母語の影響からずっと逃れられないことになる。しかしレトリックのレベルで考え、異文化の書く型を使いこなすことによって、異なる論理と思考法を手に入れることができる。

2. 論理と文化—価値の選択と優先順位

カプランは英語で書かれた留学生のエッセイを分析したために、言語圏別に「直線的」、^う「平行」、^う「間接的」、^う「紆余曲折」の四つの論理展開のパターンを特定した。しかし論理のパターンに注目して文化を分類する方法は、言語や国という単位の他にも考えられる。たとえば、どの国(社会／共同体)にも共通して存在しているのが、政治、経済、法、社会という領域である。これらの領域には領域独自の目的と目的達成の手段^(A)が存在しており、それらを混ぜて使うことはできない。混ぜて使おうとすれば、道徳的な警鐘が鳴る。

たとえば、経済領域では効率的に最大限の収益を上げることを目的とするが、この目的を政治領域に持ち込むと汚職となり、法領域では違法となり、社会領域では不道徳となる場合が生じる。このように四つの領域は独立して存在しているが、どの領域の論理と価値観を重視しているか、つまり国の統合の原理として採用しているかは、教育、とりわけ学校で教える作文を通して判断することができる。なぜなら、教育は知識や技術を教えるのみならず、当該国の伝統や価値観の伝授を重要な目的として持っているからである。

(中略)

では領域が異なると何が変わるのだろうか。まず各領域は固有の目的と目的を達成するための手段を持っている。たとえば、経済ならば利益を上げること、平たく

い**え**ば儲けることであり、① インプットに対してアウトプットの比重が高いことである。その目的達成のためには、計算による数値の比較によって最も効率がよく安価な手段を選択する。この時、早くて安い手段を選ぶことが重要であり、手段の選択に関して道徳的な配慮は後回しになるし、哲学的な考察は全く意味を持たない。それに対して政治領域では、公共の福祉という目的達成のために、何が公共の福祉になるのか、社会を構成する多様な人々にとっての共通善とは何なのか、その「目的自体」を吟味し、公共の福祉・共通善という理念／理想に適った手段を選択する。理念の吟味には哲学的な考察が重要となり、理想の追求には、理念に対する人々の合意が必要になる。

このように価値観とは、何を優先して何を後まわしにするか(犠牲にするか／切り捨てるか)、その順位づけに現れる。そして優先の順位づけは「何を目的とするのか」によって決まる。

価値観に紐づけられた論理を考える時、「どのような論理が各領域で成り立つのか」、そして究極的には「何のために思考するのか」という問いが私たちに突きつけられる。確かに① 演繹や帰納などの推論の形式、つまり道具としての論理的思考は多様な場面で役に立つ。しかしより本質的なのは、「どの領域のいかなる価値観のもとで思考するのか」という価値の選択と、その価値に合致した論理の使用である。経済の問題として捉えるのか、政治の問題として捉えるのかによって正しい結論と結論に至る道筋は変わってくる。これを単なる制度(領域)の違い、制度固有の表現形式の違いとして受けとめると、私たちはどのような価値観に基づいて思考しているのか、どのような論理を論理的だと受けとめて思考し、判断しているのかに無頓着となり、予期せぬ文化衝突に遭ったり、判断を間違えたりする。

(中略)

エッセイの型

序論 主張

本論 主張を支持する三つの根拠(事実)

結論 主張を別の言葉で繰り返す

② 経済原理のレトリックを代表すると考えられるアメリカの五パラグラフ・エッセイは、証拠を挙げて主張の正しさを証明し、読み手を説得することを目的とする。このエッセイの最大の特徴は、最初の段落(パラグラフ)で結論となる主張が提示されることである。私たちが思考する時には、観察やデータの分析から徐々に結論に向かって推論を進めていくが、それをエッセイの型で書くには、結論を先に述べて実際の思考の過程を倒立させる。

エッセイの効率性は、冒頭で「結論」となるべき主張が先取りして提示されるエッセイの目的論的な構造に起因する。最初に到達すべき終着点を示されるため、主張に関係のない情報が入りづらい。「主張の論証」という目的に向かって、主張を支持する「事実」を三つに制限してコンパクトに論じる。主張の根拠となる三つの事実の間の関係を論じる必要もない。結論へのステップの短さもさることながら、そもそも結論が冒頭に示されているため、読み手はすばやく書き手が何を言いたいかわかむことができる。このエッセイの構造はよく的を射る矢にたとえられる。「主張」という射るべき的が冒頭に示され、的に向かって最短の距離で一直線に飛んだ矢が、的の真ん中に命中するイメージである。図1の矢印がまさにそれを示している。

論理の入れ子構造

このエッセイの全体構造は、エッセイのパラグラフの構造にも同じ形で反映されている。全体と全体を構成する要素が同じ論理で貫かれているので、それが論理の一貫性と分かりやすさに貢献している。

エッセイの肝となる「主張」は、主題文と呼ばれてエッセイの冒頭に置かれ、あとに続くパラグラフではその主張を支持する具体的な事実が述べられる。同様に、エッセイを構成する各パラグラフも、冒頭にそのパラグラフの概要が一文でまとめられてあり(トピック・センテンスと呼ばれる)、その後具体的に説明する文が続く。トピック・センテンスはパラグラフのどこにでも現れる可能性があるが、多くはパラグラフの冒頭に置かれるため、各パラグラフの冒頭の一文を拾って読んでいけば、全体の内容がすぐに理解できるようになっている。そして、各パラグラフの最後は、そのパラグラフの主張を短くまとめた小結論で締めくくられる。エッセイ

の直線的な論理展開と効率性、明快さは、この全体の構造と部分の構造の一致によって担保されている。

アメリカ式エッセイに馴染んだ者が、彼らにとって自明のこの入れ子構造を予想して作文を読み、その期待が裏切られた時、「つな^②がりが分かりづらい」、「主張がぼやけている」、「きちんと論証されていない」作文である、つまり「論理的でない」と怒りにも似た感情が瞬時に起こるのは、この構造に込められた仕掛けの単純明快さからも理解できる。

演繹^{えき}的な書き方—最重要から具体へ

作文教育研究で著名なモフェット(J. Moffett)は、主題を提示する文がどこに現れるかによって作文構造を二つに大別した(Moffett 1968)。主題提示文が最初に現れるものを「演繹^{えき}的」作文と呼び、最後に置かれるものを「帰納的」作文と呼んだ。この分類によれば、アメリカのエッセイは、演繹^{えき}的^{えき}作文である。演繹^{えき}的^{えき}作文の完成度は、主題提示文である主張を頂点とした明確な「序列」の堅固さによって測られるという。つまり段落や文章は、主題に直接関係する最も重要な情報から、より詳細な補助的な情報へと並ぶ構造になっている。主張を支持する三つの事実も、最も強く主張を支持すると考えられる事実から順番に並べる。もとの事実^{えき}に順番がついていない以上、どのように並べてもよいのだが、無自覚に列挙するのではなく、「主張の支持」という目的に照らして最も効果的な配列を考えることが求められている。

エッセイは、「前提」となる主張が最初にぽんと置かれて、そこから具体的事実を判断する演繹^{えき}に似た形を取る。しかし論理学における演繹^{えき}的^{えき}推論の手続きそのものではないため、日本ではこの配置を「頭括型」——最初に主張を置き次に具体例で説明する構成——と呼ぶのが一般である。

(中略)

「ディセルタシオン」と呼ばれるフランス式小論文は、弁証法を基本構造とする。弁証法は、論ずべき主題に対する「一般的な見方」、「それに反する見方」、「それらを総合する見方」を〈正—反—合〉の構成に位置づけて、〈正〉と〈反〉の矛盾を〈合〉で

解決する。これらの三つの見方を検討する中で、結論を導くためにあらゆる可能性が吟味される。弁証法では、この吟味の「過程」そのものが重視される。「……は〇〇か否か」という二者択一の決断を行う場合も、両方の立場を検討し、〈合〉において「〇〇である」、「〇〇でない」の「はい／いいえ」を超える見方、すなわち極端に振れず、過去と現状を超える、より広く積極的なものの見方を提示することが期待されている。この弁証法の〈正一反一合〉の「手続きを踏むこと」が十分な審議が尽くされたことを保証すると考えられている。実際に、資格社会と呼ばれるフランスの資格試験で使われるディセルタシオンは、決められた型で書かないと、どんなに素晴らしい論文でも合格することはできない。型の「手続き通り」に書けることに意義を認めるのである。

もう少し詳しくディセルタシオンの構造を見ていこう。その型は、次のようになっている。

ディセルタシオンの型

導入 ①主題に関わる「概念の定義」、②「問題提起」、③「三つの問い」による全体構成の提示

展開 弁証法： a 定立(正)
 b 反定立(反)
 c 総合(合)

結論 ①全体の議論のまとめ、②結論、③次の弁証法を導く問い

ディセルタシオンは導入部分で、議論の中心になる主題を提示し、その主題を論じる全体構成を示す。この時、鍵になる概念の定義を行い、与えられた問いの、どの側面について論じるかを書き手自身が提起する。これを問題提起と呼び、ディセルタシオンの肝となるものである。そしてこの問題提起を「問い」の形にして表明し、さらに展開部分の〈正一反一合〉を導くための三つの問いに分解して提示することで、論文全体の構成を読者に示す。

展開部分では、書き手が立てた先の三つの問いに答える形で、主題に対する「ある一般的な見方(正)」、それとは「相反する見方(反)」、これら二つを「総合する見方

(合)]を提示してそれぞれの見方を文献の引用によって論証する。そして結論部分では、これまでの議論の流れを短くまとめ、与えられた問いに答えて結論とし、次の弁証法を想起させる新たな問いを提示して終わる(Rénauté et al. 2007 : 181-182)。

【出典：渡邊雅子『論理的思考とは何か』岩波書店，2024年，48-80ページ。なお，出題の都合上，一部を変更・省略している。】

問 1 下線部①「インプットに対してアウトプットの比重が高いこと」および下線部②「自明」を，それぞれ別の言葉に言い換えなさい。

問 2 下線部(1)について，「演繹」と「帰納」の推論の形式についてそれぞれ説明し，その具体例を記述せよ。なお，具体例については，形式が正しければ全体としての結論の真偽は問わない。

問 3 アメリカで主流の作文の型である「エッセイ」が下線部(2)「経済原理のレトリック」を代表するとはどういう意味か，説明せよ。(字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。)

問 4 フランス式小論文の形態である「ディセルタション」は，下線部(A)「政治，経済，法，社会」にしたがうと，「政治」の原理を反映したものである。その理由を説明せよ。(字数制限なし。ただし，解答欄に収まるように記述せよ。)

問題Ⅱ 次の文章を読み、以下の問いに答えよ。

受験シーズンが近づいてくると、志望校をどこにするかで悩む人は多いのではないのでしょうか。ここでは、これまでと少し話の趣を変えて、学校を選ぶときのヒントになるようなエビデンスを紹介していきます。

わが子に「少しでも偏差値の高い学校に合格してほしい」と願うご両親は少なくないでしょう。データからも、子どもを持つ親は偏差値が高い学校を好む傾向があり、さらに学力の高い子どもを持つ親ほどその傾向が強いことがわかっています。

しかし、少し立ち止まって考えてみましょう。どうして、私たちは「少しでも偏差値の高い学校に合格してほしい」と願うのでしょうか。

インターネット上では、偏差値の高い学校を目指す理由として「優秀な友人から刺激を受けられる」が多く見られます。おそらく、学力の高い同級生の影響を受けて、自分の子どもの学力も上がるだろうと期待しているからではないのでしょうか。古くから「」と言います。

経済学的に言えば、「ピア効果」が働くからと考えられます。実際に私たちは、友人や家族など身近な人から、その考え方、習慣、行動に至るまで、さまざまな影響を受けています。たとえば、喫煙、飲酒量、肥満、キャリア選択、貯蓄性向、カンニング、ゴルフの成績に至るまで、ピア効果が存在することを示したエビデンスがあるのです。

そうすると、「少しでも偏差値の高い学校に合格してほしい」と願うことは合理的なように思えます。しかし、私たちが無意識のうちに、ある強い「前提」を置いてしまっていることには注意が必要⁽¹⁾です。

それは「」という前提です。これは正しいのでしょうか。

結論から言えば、正しくありません。

アメリカのフロリダ州の公立小・中学校の児童・生徒のデータを分析した研究は、もともとの学力が上位 20 % の児童・生徒は、同じクラスに自分と同様に学力の高い同級生がいることによって学力が上昇しますが、もともとの学力が下位 20 % の児童・生徒は、同じクラスに学力の高い同級生がいることによって、むしろ

ろ学力が下がってしまったことを明らかにしています。つまり、優れた友人から良い影響を受けるのは、もともと学力が高い児童・生徒だけというわけです。

(中略)

アメリカの空軍士官学校のデータを用いた実験でも興味深い結果が示されています。空軍士官学校とは、日本でいうところの防衛大学校のようなものです。アメリカの空軍士官学校では、教育・訓練を受ける若い士官候補生は、「戦隊」と呼ばれる30人1組のグループに配属され、ともに一般教養の授業を受けたり、訓練に参加します。あるとき、士官候補生は、次のような3つの戦隊に分けられました。

●実験のグループ分け

- グループ1 学力が上位層の候補生と下位層の候補生が一緒になった戦隊
- グループ2 学力が中間層の候補生のための戦隊
- グループ3 完全にランダムに選ばれた候補生の戦隊(ほかの2つのグループと比較するための対照群)

グループ1では、学力上位層の候補生と下位層の候補生が互いに交流する機会が増えることで、学力下位層の候補生の成績が上がるのが期待されていました。

しかし、結果は期待を裏切るものでした。グループ1は平均的な成績が上がらなかったばかりか、もともと学力が低かった候補生の成績は、さらに低下してしまったのです。

実験のあとに行われたアンケート調査で明らかになったのは、学力上位層は学力上位層としか交流せず、学力下位層もまた学力下位層としか交流しなかったという事実です。そして、グループ3の中では学力上位層と学力下位層の交流は生じていたのに、グループ1では学力上位層と学力下位層の交流はかえって生じにくくなってしまっていました。

さらに驚くべきことに、3つのグループの中でもっとも成績が上昇したのは、なんとグループ2だったのです。

似たもの同士を集めたほうがよいということなのでしょう。オランダのアムステルダム大学で大学生を対象に行われた実験は、学力の低い学生同士でグループ学習をさせたほうが、学力の高い学生と学力の低い学生を同じグループにして学習をさせたときよりも成績が良くなったことを報告しています。

この実験のあとに行われたアンケート調査によれば、学力の低い学生のみของกลุ่มのほうが、交流が多く、授業にも積極的に参加していました。やはり、自分と共通点の多い同級生のあいだでは交流が生じやすく、互いに多くのことを学ぶことができるということなのかもしれません。

これらの発見はきわめて重要です。どのような学校に進学することになろうとも、結局、子どもたちは、自分で自分の友人を選びます。親がどんなに「優秀な友人と交流し、良い影響を受けてほしい」と願ったとしても、当の子どもたちは、共通点の多い友人、自分と能力の近い友人を選んでいるというわけです。まさに「③」というわけです。

心理学ではすでに自分と同じような属性、能力、価値観の人と親しくなりやすいことが明らかになっており、これを「ホモフィリー」と呼んでいます。「雲の上の存在だ」と思う人や「自分とは違う」と思う人に、親しく声をかけ、交流することは難しいということなのかもしれません。

ここで1つ疑問が湧いてきます。学力の低い学生だけを同じグループにすると良い効果があるのに、学力の低い学生が学力の高い同級生と同じグループになることによって、かえって学力が下がってしまうのはなぜなのか、ということです。

(中略)

これを考える上でのヒントになる研究があります。

それが、学内やクラス内での成績の「順位」に着目した研究です。私立学校では通知表に順位が書かれていたり、学習塾では模試の順位を書き出して廊下に貼り出されたりすることもあるそうですから、子どもたちが自分の順位を意識することもあるでしょう。

ここで、次のような状況を想像してみてください。受験の直前に、模試で80点

を取れる実力を持つAさんとBさんがいたとします。この2人の志望校は同じだったのですが、入試の結果、Aさんは第1志望校にギリギリで合格し、Bさんはギリギリで不合格となりました。Bさんは第1志望校よりは少し偏差値の低い第2志望校に合格し、進学しました。

先にも述べたように、AさんとBさんの実力はほとんど同じですが、Aさんは進学した学校での成績順位が最下位となり、Bさんは1位になりました。

このあと、成績や進学で有利になるのはAさんとBさんのどちらでしょうか。

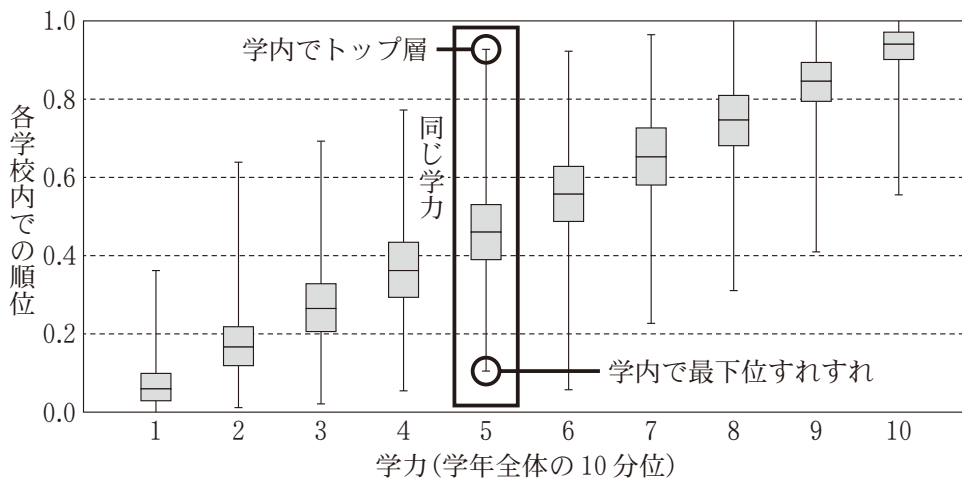
多くの人は、「少しでも偏差値の高い第1志望の学校に通っているAさんのほうが、周囲の優れた友人から良い影響を受けて、入学後の成績や進学で有利になるだろう」と考えるのではないのでしょうか。だからこそ、私たちは、わが子に「少しでも偏差値の高い学校に合格してほしい」と願うのでしょうか。

順位についての研究の結果は一貫しています。私たちの予想に反し、のちに有利になるのは、第1志望校で最下位のAさんではなく、第2志望校で1位のBさんです。「④」とはよく言ったものです。

(中略)

このことを現実のデータであらわしたのが、図1です。同じテストを受け、同じ点数だけれども、学校内の順位が異なる児童・生徒がいることを示しています。この図は、データのばらつき具合を示すのに用いられる「箱ひげ図」と呼ばれます。

図1 同じ学力でも校内順位がトップ層の生徒と下位層の生徒がいる



(注) 「埼玉県学力・学習状況調査」のデータをもとに加工(約1,000校の公立小中学校の小学校4年生から中学校3年生までの学力調査の結果)

(出所) 五十棲・伊藤・中室(2022)の64頁の図2を抜粋。

箱ひげ図の見方

「箱ひげ図」は、データのばらつき具合を知りたいときに用いられます。四角い箱の上下にひげのように伸びた棒が突き出ているのが特徴です。図1を見ながら、具体的な見方を説明します。縦軸は同じ学校・学年内の成績順位で、横軸は県内共通の学力調査の結果です。つまり、一番学力の高い上位10%の生徒の学力分布が一番右側(10)にあり、一番低い下位10%の生徒の学力分布が一番左側(1)にあります。ひげのような棒は、同程度の学力の生徒の中でもっとも校内順位の高い生徒(最大値)と、もっとも低い生徒(最小値)をあらわします。四角い箱の一番上は、同程度の学力の生徒の中で、低い順位の生徒から順番に並べたときに75%の位置にあることを示す「75パーセンタイル」(=上位25%)で、一番下が25%の位置にあることを示す「25パーセンタイル」(=下位25%)です。四角い箱の中の線は中央値(低い順位の生徒から順番に並べたときに50%の位置にある)をあらわします。

これは、慶應義塾大学の五十^{いそずみ}棲浩二氏、サイバーエージェントの伊藤寛武氏と私が、埼玉県の公立小・中学校の学力調査のデータを用いて作成したものです。図1の第5分位(中央値)を見てください。これを見ると、県内共通の学力調査で同じ点数を取ったとしても、学内の順位でトップ層に位置する児童・生徒もいれば、最下位すれすれの児童・生徒もいるということがわかります。

公立学校であったとしても、学校によって、平均的な学力が高い学校と低い学校があります。このため、同じ実力でも、周囲の同級生の学力が高い学校に入学したら自分の順位は低くなり、逆に周囲の同級生の学力が低いと自分の順位は高くなるということが生じているのです。

私たちの研究グループは、この状況を利用して、小学校のときの学内順位が中学校入学後の学力に影響を与えているかどうかを調べてみました。そうすると、小学校のときに、県内共通の学力調査でまったく同じ点数だったとしても、学内の順位が1位だった児童は、別の学校で順位が最下位だった児童と比較すると、中学校での数学の学力テストの偏差値が2.1~6.2、国語が3.1~6.2も高くなっていることがわかりました。

この影響には異質性があります。順位が与える影響は、女子よりも男子に大きく、平均的な学力が高い学校のほうが大きくなっています。また、小学校の順位は国語や算数で決まっているにもかかわらず、中学校時点の英語の学力にプラスの影響を及ぼしていました。

経済学や心理学では、ごく身近にいる人とのみ比較することで、自分の能力を誤って見積もってしまうことを「井の中の蛙^{かわず}効果」と呼んでいます。ここで生じていることは、まさに井の中の蛙効果と言えそうです。

(中略)

ここで、学力の低い児童・生徒が、高い児童・生徒と同じクラスになることで、かえって学力が下がってしまう理由を改めて整理してみることにしましょう。

学力の高い同級生と交流することで正の 効果が働き、自分の学力も高くなると予想されます。その一方で、周囲の同級生の学力が高いと、自分の学内順位は低くなってしまうため、 効果によって学力が下がります。つま

り、優秀な友人から受ける正の ア 効果を、順位が低くなってしまう イ 効果が相殺してしまったのではないかと考えられるのです。

こう考えてみると、たとえ運良く実力より上の志望校に滑り込み合格を果たしたとしても、学内やクラス内の順位が低くなれば、長い目で見れば良い結果をもたらさない可能性もあります。

現に、予備校や学校関係者のあいだでは、無事に第1志望校に合格したにもかかわらず、入学したあとの定期試験で下位になって以降、順位が下位のままとどまり続ける生徒が存在することが知られており、彼ら彼女らのことを「深海魚」と呼ぶそうです。

自分の子どもや生徒が「深海魚」とならないために、私たちにできることは何でしょうか。このことを考えるためには、順位がどうしてここまで大きな、そして長期的な影響をもたらすのかというメカニズム⁽²⁾について考える必要があります。

これには、いくつかの仮説が考えられます。

(中略)

それでは、順位は知らせないほうがよいのでしょうか。

周囲の人と比較したときの自分自身のパフォーマンスを正確に知ることができるというのは悪いことばかりとは限りません。順位を知ること、競争心が刺激され、やる気が出てくるという人もいるでしょうし、自分の強みや弱みを客観的に把握し、改善への糸口とすることもできるでしょう。

(中略)

つまり、一概に順位を知らせないほうがよいというわけではなく、「伝え方に工夫が必要だ」⁽³⁾ということではないのでしょうか。

【出典：中室牧子『科学的根拠(エビデンス)で子育て—教育経済学の最前線』ダイヤモンド社、2024年、150-166ページ。なお、出題の都合上、一部を変更・省略している。】

問 1 , , に入る^{ことわざ}諺を, 下記から選び, その数字を答えよ。

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1. 鶏口となるも牛後となるなかれ | 2. 情は人の為ならず |
| 3. 三人寄れば文殊の知恵 | 4. 類は友を呼ぶ |
| 5. 百聞は一見に如かず | 6. 朱に交われば赤くなる |

問 2 下線部(1)「私たちが無意識のうちに, ある強い「前提」を置いてしまっている」とあるが, その「前提」とはどのようなものか。 に入る前提を文章で答えよ。(字数制限なし。ただし, 解答欄に収まるように記述せよ。)

問 3 に入る効果の名称を, 文章中の語句を用いて答えよ。

問 4 下線部(2)について学内やクラス内での順位が大きな, そして長期的な影響をもたらすメカニズムには, どのような仮説(可能性)が考えられるか。考えられる仮説(可能性)を, 複数挙げて, それぞれ具体的に説明せよ。(字数制限なし。ただし, 解答欄に収まるように記述せよ。)

問 5 下線部(3)について筆者は, 順位を知らせない方がよいというわけではなく, 「伝え方に工夫が必要だ」と述べているが, 「伝え方の工夫」として, どのような工夫が考えられるか。本文を踏まえたうえで, 教師ができる具体的な工夫を複数挙げて, そのように考えた理由を述べよ。(字数制限なし。ただし, 解答欄に収まるように記述せよ。)